

が多いためと考えられた。また出血性梗塞はいずれも予後に影響を与えないと考えられた。

82) MRI により脳幹部小梗塞と診断された pure sensory stroke および pure motor hemiparesis

増田 良一・福田 修 (富山医科薬科大 学 脳神経外科)
高久 晃
佐藤 秀次・鈴木 尚 (金沢脳神経外科 病院)

症例 1: 67才男性。右半身の触覚低下。温痛覚及び深部知覚は保持。運動麻痺は認めず。発症 5 日目に MRI にて、IR 2000/400 で低信号、SE 2000/80 で高信号の延髄左内側部小梗塞を認めた。視床には異常は認められなかった。

症例 2: 62才男性。顔面を含む右片麻痺。知覚障害は認めず。発症 7 日目に MRI にて、IR 2000/400 で低信号、SE 2000/80 で高信号の橋底部右側小梗塞を認めた。内包部には異常は認められなかった。

両例とも全経過を通して CT では梗塞巣は認められなかった。

83) Percutaneous Transluminal Angioplasty (PTA) で治療した Subclavian Steal Syndrome の 1 例

皆河 崇志・小池 哲雄 (新潟大学脳研究 所 脳神経外科)
佐々木 修・田中 隆一
伊藤 寿介 (新潟大学歯学部 放射線科)
青木 廣市・長谷川 彰 (長岡中央総合病 院 脳神経外科)
西巻 啓一

我々は、右鎖骨下動脈狭窄による subclavian steal syndrome の一例に PTA を施行し、良好な結果を得たので報告する。症例は労作時の右手の脱力を主訴とする 46才の男性で、両上肢の血圧の明らかな左右差を認め、右鎖骨上部で血管雑音が聴取された。血管撮影では、右鎖骨下動脈に著明な狭窄があり、右椎骨動脈 (RVA) の逆流現象を認めた。transfemoral route で PTA を行ったが、この間 RVA への distal emboli を防止する目的で transbrachial route のバルーンカテーテルで RVA を遮断した。術直後より狭窄部は著明に拡張し、自覚及び他覚症状は消失した。今後、長期の経過観察が必要だが、PTA は本症に対して有用と思われた。

84) 急性期血管内血栓溶解術が奏効した脳塞栓症の 1 例

— Balloon catheter による局所ウロキナーゼ動注療法 —

菅原 孝行・高橋 明 (東北大学脳研 究 脳神経外科)
蘇 慶展・須賀 俊博
吉本 高志・鈴木 二郎

バルーンカテーテルより閉塞部位にウロキナーゼを投与し、有効であった脳塞栓症の 1 例を報告する。症例は 37 歳男性。消防訓練で 1 階から 7 階まで階段を駆け登った後、右片麻痺、失語症で発症後 3 時間で入院。仙台カクテルを投与しつつ、血管写で左 M₁ 近位部閉塞を認めた。血管写について leak balloon catheter を M₁ に挿入、ウロキナーゼ 96 万単位を動注し、MCA 分枝の一部閉塞を残して再開通した (発症 5.5 時間)。CT 上左基底核部の出血性梗塞を呈したがすみやかに神経症状の改善をみた。後日、心エコーで左房粘液腫と診断され、胸部外科にて腫瘍を摘出した。現在、神経脱落症状なく職場復帰している。

85) 椎骨動脈解離性動脈瘤による小脳梗塞の 1 治療例

三森 研自・中川 端午 (北海道脳神経外 科 科記念病院)
桜木 貢・都留美都雄 (北海道大 学 脳神経外科)
阿部 弘 (北海道大 学 放射線科)
宮坂 和男・阿部 悟

椎骨動脈解離性動脈瘤により後下小脳動脈閉塞をきたし、重症小脳梗塞を発生した若年者の 1 治療例を若干の文献的考察を加えて報告する。症例は 36 才男性、S61 年 1 月 27 日早朝突然めまい、嘔吐出現し、某院入院した。翌朝急に意識障害におちいり当院に搬入された。入院時、失調性呼吸、意識半昏睡、両側瞳孔縮小、対光反射消失、眼球正中位固定、四肢麻痺を認めた。CT スキャン上右小脳半球に広汎な低吸収域及び水頭症の所見を認めた。ただちに右脳室ドレナージを施行後、脳血管撮影をおこなった。右椎骨動脈一後下小脳動脈分岐部の領域に解離性動脈瘤を認めた。即日、後頭蓋窩内減圧術をおこなった。術後経過順調で軽度複視を残すのみで 4 月 15 日退院した。

86) 同時多発性に血管閉塞を来した脳塞栓症の 1 例

黒沢 久三・小川 彰 (国立仙台病院脳 卒中センター)
嘉山 孝正・桜井 芳明

心臓由来の塞栓症で、同時多発性に脳血管閉塞をきたしたいわゆる shower emboli の症例を経験し、経時